

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ハイマートー祖国ー意識の重層 (私のスケッチ・ブック (5))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005888

ハイマート—祖国—意識の重層

国立民族学博物館

森 明 子

◆ハイマート、祖国、国境

「祖国」ということばがある。このことばに、私たちはどのようなイメージをもっているだろう。私が最初にこのことばの意味に接したのは、小学生か中学生のころ読んだ本だったと思う。音楽家ショパン[1810-49]について書かれた本のタイトルが、『祖国へのマズルカ』だった。確かなことは覚えていないが、19世紀のポーランドの革命運動中、フランスに逃れたショパンが、祖国の人々への思いをマズルカにこめて作曲した、というような意味だったと思う。当時、革命の意味はほとんど理解できなかった。それでも、後になって祖国ということばを見ると、よくこの本のタイトルを思い出した。

祖国ということばには、外国にいて自分の本来の国を思い出す、というようなイメージがつきまとう。母や祖父の生まれた国を指して祖国という場合もある。ドイツ語で祖国にあたる語は「ファーターランド」「ムッターランド」あるいは「ハイマート」であろう。「ファーターランド」「ムッターランド」は文字通り「父の地」「母の地」であり、「ハイマート」は英語の「ホーム」に近い。このハイマートという語は、故郷という意味にも使われる。たとえば都市で生活している人が、出身の町を指してハイマートという。

日本に生まれ育った者にとって、祖国の境

界は明快である。外国にいて日本を思うとき、私は微妙な曲線を描いて配置される4つの島をイメージしている。いい古されたことではあるが、海が国境をつくるこの国では、地理的な境界は明瞭である。このため私たちは、国の境が複雑な状況を想像するのが下手である。また、大半の日本人は、祖国という意識が問題になった経験をもっていない。

しかし、地つづきの国境をもち、しかもその国境がいつでも変更しうるヨーロッパの国では、祖国ということばの意味はもっと複雑である。また、ことばそのものが微妙な政治を含んでいる。そのひとつの例として、私が生活していたオーストリア・ケルンテン州の村を紹介したい。

◆国境の村から

その村は、オーストリアとスロヴェニアの



国境に位置している。スロヴェニアは1990年に独立宣言するまで、ユーゴスラビアを構成するひとつの共和国だった。ケルnten州は、オーストリアの南の端に位置する。スラヴ人が住んでいた地方に、8世紀ころ北からドイツ人が進出して、社会の上層を占めていった。州の北部からドイツ化し、南部では、都市にある程度ドイツ人が住んだが、農村は長いあいだ、スロヴェニア人の割合がひじょうに高かった。

私の住んでいた村の場合、1890年には95%がスロヴェニア語を日常語としている。その後、1910年には91%、1923年には84%、1934年には44%と減少し、ドイツ語を日常語とする人の割合が増えていく(国勢調査による)。そして、1991年には、ドイツ語83%、スロヴェニア語14%になっていた。

この変化は、スロヴェニア語を話す人が減って、ドイツ語を話す人が増えたことを意味するわけではない。そこに住んでいる人はほとんどかわっていないので、実際に日常使う言語が短期的に変化したわけでもない。短い間に変化したのは「自分が何語を日常語と考えているか」という意思である。

村の多くの人は、ドイツ語とスロヴェニア語の両方を話す。スロヴェニア語を話すのは年長の世代に多く、若い世代ではドイツ語しか話せない人もいる。結婚や仕事を契機によそから移ってきた人は、出身地によってスロヴェニア語を話せる人と話せない人がいる。それでも、両方の言語を話せる人の数は少なくないので、話す相手によって、スロヴェニア語とドイツ語を使い分けている。

こういう人が国勢調査のときに、自分が何であるのか意思決定した結果が、変化しているのである。たとえば1934年にスロヴェニア語を話せる人が44%しかいなかったとは考えられない。ヨーロッパでは、自分のことばが



向こう側は当時ユーゴスラビア社会主義連邦共和国。この国境は住民のためのもので、オーストリアとユーゴスラビアの両国籍者(当時)だけが通行できる。

図1 村にある国境

何語であるかということ、自分が何人であるかということと、ほぼ同じ意味を持つ。ドイツ語とする人と、スロヴェニア語とする人の中には、はっきりした意識の違いが生まれている。

◆「ハイマートトロイ」

村の国境は1922年以後のものである。それまで境目のまったくなかった場所に、新生国家ユーゴスラビアとの領域を分けるために、初めて国を分ける線が引かれた。どこを境界とするかについて、1920年に住民投票が行われ、それまでの村を分断する国境線が決定された。こうしてできた国境のこちら側と向こう側に、当然のことながら家族、親族や友人が分かれるという事態が起こった。また、村が分断されたことで、オーストリアに帰属することになった人の一部は、それまで通っていた学校や教会、父祖の墓との結びつきを失うことになった。当時、オーストリアへの帰属を選んだ人も、ユーゴスラビアへの帰属を選んだ人も、同じ村の住人として等しくスロヴェニア語を日常語とし、ドイツ語をほとんど知らない人々だったのである。

スロヴェニア人が多く住む地方の住民投票で、ユーゴスラビアよりオーストリアへの帰

属を選んだ人が少なからずあったことは、注意を要する。住民投票に先立って、ユーゴスラビアの軍がケルンテンに侵入したときにも、ケルンテンの多くのスロヴェニア人が、ドイツ人とともに市民軍をつくって戦った。彼らは今日、ケルンテンをユーゴスラビアから守ろうとして戦った英雄とされており、現在もしばしば新聞に掲載される。この人々を評する語が「ハイマートトロイ（ハイマートに忠実な）」である。この人々の行動に共感し、ユーゴスラビア（スロヴェニア）に対立する立場をとる人も、自らを「ハイマートトロイ」と称する。

ここで、ハイマートとして考えられているのはケルンテン州であり、それは他国の野心から守らなければならない祖国である。しかし、そのハイマートに住んでいて、ハイマートを守っている人々は、スロヴェニア人ではなかったか？ ヨーロッパの国境地方がかかえる複雑な問題のひとつが、ここに端的にあらわれている。ユーゴスラビアの民族主義的なスロヴェニア人にとって、ケルンテンのハイマートトロイのスロヴェニア人は、スロヴェニア人であってスロヴェニア人ではない、「裏切り者のスロヴェニア人」と呼ばれた。

◆言語の選択、祖国の選択

ところで、ケルンテンに住んでいるスロヴェニア人の中には、ユーゴスラビアに共感をもっている人ももちろんいる。そのような人の立場は、市民軍として戦ったハイマートトロイの英雄とも、住民投票でオーストリアへの帰属を選んだ人とも対立することになる。

ある女性の父親は、ドイツ語世界に共感をもつ人であったという。しかし父の母と父の弟は、スロヴェニア人の世界と強く結びついていて、父の弟はチトーのパルチザン部隊にも加わっていた。そして彼女自身は、ドイツ

語世界に共感を寄せている。彼女の場合、家族の中でもスロヴェニア語世界に帰属する者と、ドイツ語世界に帰属する者が分かれている。ふたつの言語をもっていて、個人の意志でそのいずれかを選択する場合、このようなことは起こりうる。しかもそこでは、言語だけでなく、祖国も選択されることになる。「祖母と叔父がスロヴェニア人だったから、私のムッターランドはスロヴェニアだという人がいる。しかし、私は私だ」と彼女は語った。

ここで「ムッターランド」という語が指示するところは、ユーゴスラビア（スロヴェニア）であるが、彼女自身はそれを選択していない。ハイマートにしろ、ムッターランドにしろ、それは国境ができなければ、この村を境にして区分されることのなかった意識であり、そうであれば、ドイツかスロヴェニアかという意識も、今日みるほどには強くなかったと想像される。国境の向こう側とこちら側で、景観も生活習慣もほとんどかわることはない。違いがあるとすれば、国境成立後の時代に発達したテクノロジーを受容しているオーストリアと、その恩恵に浴することの少ないスロヴェニアの違いであり、また国境成立後の学校教育があるだけである。

◆政治に対する意識

このような違いを生み出したのが政治である。村の人からみれば、政治がそのような違いを生み出すがゆえに、政治に対して敏感になる必要があるし、国境が危険にさらされることはひじょうな不安となる。

第二次世界大戦中、ヒトラーの政権のもとで、この国境は数年の間開かれた。オーストリアを含めた大ドイツの領土が拡大した時期である。敗戦後は一転して、村がユーゴスラビア領の一部になるのではないかと予想され

た。ソ連とユーゴスラビアの関係悪化という国際政治の結果、からくも第二次世界大戦以前の国境が維持されることになったが、同時にケルンテンでは、少数民族の言語としてスロヴェニア語を保護することが、国家条約として義務づけられた。ユーゴスラビアを納得させるための条項である。

国際社会の中でみれば、少数民族保護は重要なモラルである。しかし、村に生活している人々にとって、スロヴェニア語保護の政策は、1920年以後の経験の延長に位置づけられる。保護しなければならぬスロヴェニア語は、彼らにとって少数民族の言語ではなく、自分が選択しなかった国家の言語である。しかも、それはユーゴスラビアで権威を与えられた標準スロヴェニア語であって、かつて祖父母の使っていたスロヴェニア語の方言とはかなり異なる。

村の少なからぬ人々が、ユーゴスラビア（スロヴェニア）政府の存在が垣間見えるこのような政策に、国境への不安をかきたてられている。そのような人々は、自らがよりドイツ的になることによって、国境をより安定させようとしているようにみえる。このような人々の中に、ドイツ・ナショナリズムに共感する人があらわれている。その一方で、スロヴェニア・ナショナリズムに近い立場をとる人もあり、またそのどちらの立場からも離れている人もいる。国境地方で、ふたつの言語、ふたつの祖国をめぐる、このような緊張が働いているのである。

◆ハイダー氏への支持

さて2000年2月、オーストリアで極右政党の自由党が政権に加わり、国際社会の抗議と制裁をあびている。自由党はハイダー氏（2000年2月末、党首を辞任）の影響のひじょうに強い政党であるが、そのハイダー氏は、



村内を行列して十字架を聖別する。司祭の後に合唱団がしたがって歌う。背後はリンゴの樹。

図2 村の教会の祭り

ケルンテン州の知事でもある。ナチスに近い立場をとるハイダー氏が、どうして人々の支持を得るのか、外国人の目からは理解しにくい。しかし、このようなケルンテンの状況を考慮すると、人々の政治意識も少しは理解できるのではないだろうか。ケルンテンの人々が、第二次世界大戦中のナチスの政策を擁護しているわけでは、決してない。ハイダー氏のドイツ・ナショナルに近い発言が、スロヴェニアとドイツとの間で不安に揺れ動きながら、ドイツの側に寄りたいと感じている人々に、心強く迎えられるのである。

国境によって区分された空間に生き、そこに意味を見いださざるをえない人々にとって、国境は強い関心的であることは事実である。しかしこの人々にとって、国境は政治においてのみ意味がある。同じ人が、国境の向こう側の親族や友人を仲間と意識し、これらの人々に細やかな心配りをする人でもあることを、指摘しておきたい。人間と人間の関係として見るとき、この人々のハイマートは、国境線とは関係ない広がりをもっていると考えてよい。